

所報

No.142
令和6年2月15日

富山県総合教育センター

富山市高田525

E-mail: center@tym.ed.jp (代表)
URL: https://www.center.tym.ed.jp

目次

- 巻頭言 1
- 海外派遣事業事前研修会、各部の研修・事業 1
- 調査研究事業の概要 2・3
- センター事業より 3・4
- 随想 5
- 連載「知って得05」 6

巻頭言

明るい未来のために －「わかる授業」の反省から－

副所長 横田 淳一

幼いころ祖父母が寝床で語ってくれる昔話が好きでした。お気に入りには、「姥捨て山」でした。匿かくれておいた老人の経験や意見を聞いて難題を乗り越えるという物語と大好きな曾祖母の姿を重ねて聞いていました。祖父母は曾祖父と同じ養蚕を営んでおり、経験が仕事にたいへん役に立っていました。自然の中の生活で苦勞も多かったと思いますが、思い出される姿は「人生の楽園」です。今でも憶えています。

日本が先進国の仲間入りをした頃から、「これまで通り生きていけばいい」と呑気に考えていることができない時代になりました。私の親は祖父母とは異なる職業に就きました。そして、私自身も親の職業とは違う教員になりました。しかし、そんな時代でも、若いころに選んだ1つの職業を続けることが多く、私も38年間教員を続けています。

ではこれからどんな社会を、子供たちは生きていくのでしょうか？

このごろでは、一人の人の職業が一生の間にいくつかわることも珍しくなくなってきました。同僚のご子息が転職されたという話を多数聞き、そのバイタリティに驚いていたのですが、愚息も昨年転職しました。

妊娠中の妻も子供もおり、私なら絶対しない（できない）と思いながら、新しい時代の生き方を感じました。

「グローバルサウス」と呼ばれる国々が著しく成長し、日本の経済力が低下しています。明るい未来のためには、一人一人が「自ら道を切り開く能力」を身に付け、政治・経済や科学的な問題（最近で言えば新型コロナウイルスや地震など）について適切な判断ができることが重要です。そのためには、画一化されていない考えができる人々を育て、できるだけいろいろな考えを出し合うことが大切です。一人一人違うことが肝心です。

私自身の教員生活を振り返り、生徒に手をかけて与え続けて、教えすぎてきたのではないかと反省しています。「わかる授業」と言いながら、これは大切なことだから「何とかしてわからせよう」とする意思が働いて、工夫を重ねただけの授業だったのではないかと。

教えすぎをやめ、「みんな一緒」を手放し、もっと個別最適な学びが大事にされるようになれば、素晴らしい世界が開けると思います。いままでの大人が築いてきたのとは違う、新しい社会が始まることを期待しています。



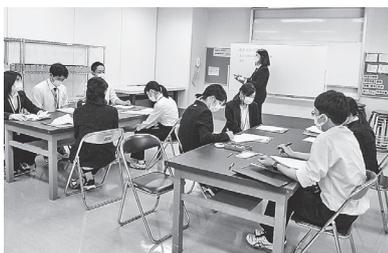
第41回県高等学校生徒海外派遣事業
事前研修会より

ふるさと富山理解研修
「英語でプレゼンテーション練習」(左)
「五箇山民謡のプレゼンテーション練習」(右)



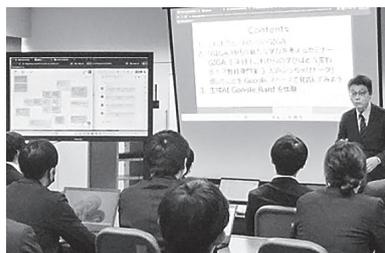
各部の研修・事業より

教育研修部



初任者研修会（特別支援）
協力校研修・班別協議

科学情報部



初任者研修会（高等学校）
ICT活用研修

教育相談部



体験交流活動「おもしろ科学実験」
静電気遊び

令和5年度 調査研究事業の概要

教育研修部

探究的な学習の実現に向けた授業づくりに関する調査研究(2年次)

— 「総合的な学習の時間」を通して —

近年、少子高齢化や人口減少の進行、AI等の技術革新やグローバル化の進展が急速に進んでおり、社会の変化が加速度を増すとともに、予測困難な時代を迎えています。

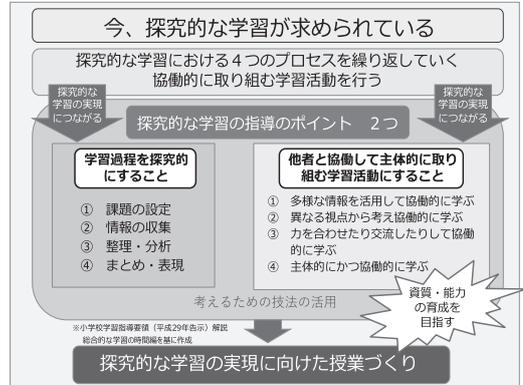
こうした時代だからこそ、探究的な学習に取り組み、答えのない課題に対して、多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見いだしていくことができる資質・能力を育成することはとても重要なことといえます。

教育研修部では、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探究的な学習の過程に沿って学習活動を繰り返していくこと」「協働的に取り組む学習活動を行うこと」を調査研究の視点とし、子供たちの学習の質を高め、探究的な学習の実現に向けた授業づくりを目指してきました。

今年度は、次の3つの研究に取り組みました。

- 研究1 子供が自ら課題を解決していくための単元づくり
- 研究2 他者と協働して主体的に取り組む学習活動による探究的な学習の充実
- 研究3 探究的な学習のよさを理解するための取組

この調査研究を通して、現場の先生方の日々の授業に寄り添い、子供たちの資質・能力を育む授業づくりにつながるよう努めてきました。2年間の成果や課題について報告します。



探究的な学習の実現に向けた授業づくりを目指して

科学情報部

授業におけるICTの活用に関する調査研究(2年次)

— 学習場面に応じた1人1台端末の活用を中心として —

中央教育審議会答申では、「『令和の日本型学校教育』の構築に向けたICTの活用に関する基本的な考え方」について、「ICTを主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かす」ことが方針として示されています。

本調査研究では、「教育の情報化に関する手引」に示されている「ICTを効果的に活用した学習場面(10の分類)」におけるICTを活用した学習活動を具体的に提案し、授業実践を通してそのポイントと効果を検証しました。

2年次の調査研究では、1年次の調査研究を基に、以下の3つの研究を柱に進めました。

- ・研究1 「1人1台端末の活用に関する教員と生徒の意識の把握」
- ・研究2 「初年度の成果を生かした学習場面に応じた1人1台端末の効果的な活用」
- ・研究3 「1人1台端末の活用に関する教員の意識向上への取組」

本調査研究を通して、学習場面におけるポイントと効果を明らかにすることで、いろいろな学習場面において教科・単元の枠を超えて、1人1台端末の活用が進みました。さらに、教員のニーズに合わせた研修会や体験会を行うことで、1人1台端末の利活用推進につながるものが明らかになりました。

A 一斉学習	B 個別学習		C 協働学習	
<p>挿絵や写真等を拡大・縮小、画像への書き込み等を用いて分かりやすく説明することにより、子供たちの興味・関心を高めることが可能となる。</p>	<p>デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べること、自分に合った進度で学習することが可能となる。また、一人一人の習熟の程度等に合わせた学習。</p>	<p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による家庭学習</p>	<p>タブレットや電子黒板等を活用し、教室内の授業や他地域・海外の学校の授業や学習について生徒間による意見交換、発表などを行い学びあふ活動を通じて、思考力、判断力、表現力などを育成することが可能となる。</p>	<p>グループや学級全体での発表・話し合い</p>
<p>A1 教員による教材の提示</p> <p>画像の拡大提示や書き込み、挿絵、動画などの活用</p>	<p>B1 個に応じた学習</p> <p>一人一人の習熟の程度等に合わせた学習</p>	<p>B2 調査活動</p> <p>インターネットを用いた情報収集、写真や動画等による家庭学習</p>	<p>C1 発表や話し合い</p> <p>グループや学級全体での発表・話し合い</p>	<p>C2 協働での意見整理</p> <p>複数の意見・考えを整理して整理</p>
<p>B3 思考を深める学習</p> <p>シミュレーションなどのデジタル教材を用いた思考を深める学習</p>	<p>B4 表現・制作</p> <p>マルチメディアを用いた資料、作品の制作</p>	<p>B5 家庭学習</p> <p>情報端末の持ち帰りによる家庭学習</p>	<p>C3 協働制作</p> <p>グループでの分担、協働による作品の制作</p>	<p>C4 学校の壁を超えた学習</p> <p>遠隔地や海外の学校等との交流授業</p>

文部科学省「教育の情報化に関する手引(追補版)」(令和2年6月)



「ICTを効果的に活用した学習場面(10の分類)」

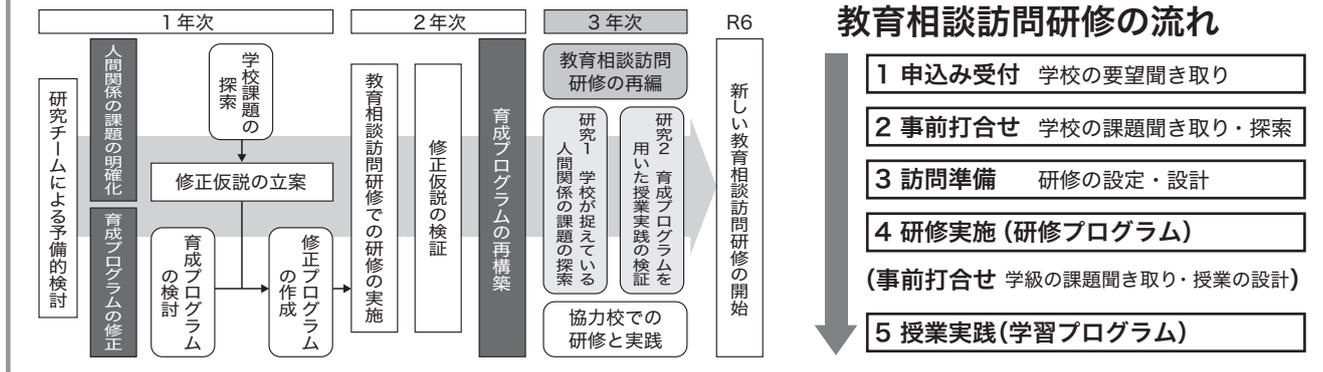
「1人1台端末を活用した授業実践(GeoGebra)」

児童生徒の人間関係の課題に対応した育成プログラムに関する調査研究

— 教師と児童生徒の相互成長を促す教育相談訪問研修の再編(3年次) —

教育相談部では、これまで開発された育成プログラム(研修プログラム・学習プログラム)を学校の個別の課題に対応したものになるように修正し、学校現場の支援に生かせるよう教育相談訪問研修の再構築を目指して研究を進めてきました。3年次は、学校が捉える人間関係の課題の探索、教育相談訪問研修の流れの確かめ、研究協力校での研修プログラムと授業実践の支援に取り組みました。

研修プログラムの設定・設計では、学校や学級担任が捉えている課題を踏まえて学校とやりとりを重ね、学校の課題に合った研修となるよう学校と協働して研修をつくってきました。また、研修プログラムを受講した先生方と、学習プログラムを行う児童生徒との実践でどのようなことが起こるのかを研究協力校での授業実践から分析しました。授業の場において、教師と子供、子供と子供の間で起きたこと、学校と協働でつくる教育相談訪問研修の詳しい流れについて発表会や研究紀要等で報告します。



センター事業より

外国語指導助手の指導力等向上研修会

(教育研修部)

JET プログラムに参加するすべての ALT と日本人外国語教員 (JTL) を対象として、一層効果的な語学指導ができるよう必要な知識・指導技術等の習得を目的として、毎年 11 月に 2 日間の研修会を開催しています。今年度は高等学校・特別支援学校・小学校・中学校・義務教育学校と全校種から JTL も参加し、2 日間で合計 155 名が受講しました。

ALT と JTL がともに研修を受け外国語教育の課題を共有することでチーム・ティーチングの質の向上を図るとともに、2 年目から 5 年目の再任用 ALT はワークショップを運営することで、さらなる指導力の向上も図っています。

また、今年度は岩手大学のジェームズ・ホール教授を講師としてお招きし、新学習指導要領について事例を交えて分かりやすく解説していただいたうえで、効果的な指導法について提案をいただきました。

日程	研修内容
11月15日(水)	開会式、Icebreaker、ワークショップⅠ・Ⅱ・Ⅲ、講義Ⅰ
11月16日(木)	講義Ⅱ、ワークショップⅣ・Ⅴ・Ⅵ、Feedback、閉会式

受講者の声

- ◎全国学力・学習状況調査でロースコアだった問題について、課題を明確にいただき、大変勉強になった。
- ◎小学校外国語活動の段階から、生きて使えるやり取りを繰り返し行い、力をつけていく必要があると考えた。
- ◎適切なワークショップが準備されていた。3学期の指導の中に取り入れてみたい。
- ◎有意義な研修だった。初めての参加だったが他の ALT や JTL と交流できたことがよかった。
- ◎各ワークショップで話し合いの機会が多くあったことで、より深く内容を理解することができた。



講義の内容についてディスカッションをする受講者



ワークショップで教材を制作する受講者

センター事業より

高等学校理科実験実技研修会

(科学情報部)

高等学校の理科実習教諭・助手を対象として、基礎的な実験・実習技術の向上と指導力の充実を目的に、毎年10月中旬に2日間の研修を行っています。受講者が直接交流できる機会でもあるため、参加率の大変に高い研修会であり、今年度は31名が受講しました。

物理・化学・生物・地学の4分野の実験実技を2日間で実施し、受講者は半日1分野として4分野全てを受講します。毎年、できるだけ現場ですぐに活用できる実験を取り上げ、作製した教材は持ち帰って学校で活用してもらっています。

日程	10月17日(火)、10月18日(水)			
内容				
	交流の演示装置の製作	硫化水素を用いた実験	ニワトリの心臓の解剖	ラジオ天気図の作成
	<物理> 交流の演示装置の製作 簡易霧箱の製作 放射線の観察	<化学> 反応エンタルピー エントロピーの導入実験 硫化水素を用いた実験	<生物> ニワトリの心臓・脳・ 神経・筋肉・骨の観察 骨格標本作り	<地学> 日本の四季と天気図 震度とマグニチュード

受講者の声

- ◎いろいろなアイデアを紹介してもらえてとてもありがたかった。すぐに見える教材も自作できるものなのでありがたかったです。
- ◎学校で活用できそうな内容が多く、レベル的にもかみ砕いていただけてとてもよかったです。
- ◎実験の準備の参考になる研修でした。
- ◎実習の器具、装置を安価で安全に使えるように考えられていてとても参考になりました。

不登校児童生徒に対する支援推進事業 第2回 不登校児童生徒に対する 支援研修会

(教育相談部)

- ◆日時：令和5年11月7日(火) 14:00～16:30
- ◆講師：NPO法人全国不登校新聞社
代表理事 石井 志昂 氏
- ◆演題：「不登校の子どもが新しい一歩を踏み出す時は」

本研修会は、市町教育支援センター(適応指導教室)相談員やフリースクール等民間の支援団体を対象にしていますが、今回は小中学校、義務教育学校の教職員にも対象を拡げて実施しました。石井氏ご自身の不登校経験等を交えながら、不登校の状況を選ぶことは必要であることや徹底した休みをとること、周囲の大人が当事者よりも前に出ない対応を心がけることなど、子どもの気持ちを第一に考える支援が大切であることについて教えていただきました。また、ワークショップやオープンチャットを通して参加者同士が目の前に浮かぶ子どもの気持ちを想像したり、支援の在り方を考えたりする時間となりました。



特別支援学校特別支援教育 コーディネーター連絡会議

(教育相談部)

本連絡会議は、特別支援学校のセンター的機能に関する情報交換を通して、各学校間や総合教育センター等との連携を深めること、特別支援教育コーディネーターの資質向上を図ることを目的として行っています。特別支援学校は、地域の幼・小・中・高等学校からの要請に応じて、児童生徒の支援への助言等を行っており、本連絡会議での情報交換は、支援の充実につなげることも意図しています。

今年度の連絡会議は3回実施し、第1回、2回では、校内資源を活用したり、関係機関と連携したりして支援を行った事例について情報交換を重ねました。また、小中学校等が主体となって児童生徒の支援を考えられるようにするための工夫について意見交換を行いました。第3回では、各校が要請に対して小中学校等へどう支援したか、その際、どのような工夫や配慮を行ったかなど、今年度の取組を報告し合い、情報共有を行いました。

随想1

無理に友だちをつくらうとしない？

学力向上アドバイザー 吉倉 哲夫

私は、令和6年2月で66歳になる。これまでの人生を振り返って、自分には「親友」と呼べる友人がいないなど、しみじみ感じている。おそらく、私のことを「親友」と思っている人もいないだろう。実はこれまでもたびたび、「自分には本音で、心の底まで話せる友人はいないな」と、不安になったり自信を無くしたりするようなことがあった。先日、エッセイストの松浦弥太郎著『眠れないあなたに おだやかな心をつくる処方箋』という本を目にした。

「人間関係にとらわれない」の話で、心に引かれた言葉を紹介する。

- ・仲良くなることが良いこととは限らない。
- ・人に好かれようと努めてはいけない。
- ・友だちや知り合いが多いことが、一番大切だと思っていたのに、結果として、友だちに合わせようとして自分自身が疲れてしまうことになった。
- ・あえて、友だちから距離を置いて、自分自身と向き合うことを大切にするようにした。
- ・他人と群れずに、適度な距離感を保つことで、心穏やかにできること、人に対して誠実な態度を取れるようになった。
- ・心が穏やかな状態を保って築く人間関係の方が、長く続いていく。
- ・人に大きな期待をしない。「期待」って、とてもわがままな感情だと思う。「期待」とは、あまりにも一方的だと気付いた。
- ・「大きな期待をしない」ということは、決して相手に尊敬の気持ちを抱かないということではない。

これまでの人との接し方を振り返ってみると、意識してきたわけではないが、この考え方に近い行動を取ってきたように思う。

筑波での中央研修で仲良くなった県外の仲間が6名おり、今でも当番を決めながら毎年集まって旅行と飲み会をしている。会えば気兼ねなく話せる仲間である。数年に1回、高校の同級会をするが、いつものように集まる仲間がいる。身近にも、無理に親密になろうとはしなかったけれど、何かあれば頼れる友だち（知人）がいる。

この後も、そんな友だちを心の支えに、心穏やかに過ごしていこうと思う。

随想2

晴耕雨読

教育相談部長 北田 邦弘

私の母は、昭和16年生まれです。中学校を卒業して旧井口村の家を出て、旧井波町にある紡績工場に勤めました。同じ年代の人たちと会社の寮で共に暮らし、仕事をしたときのことをよく話してくれます。今とは時代が違うとはいえ、15歳の子供（？）が親元を離れて生活するというのは、あまり想像できません。

その母が、本を読むようになりました。1年ほど前に父が亡くなり、一人で暮らすようになったころからです。これまで本を読んだことがなかった、という母ですが、私が図書館で大活字本を借りていたり、話題になっている本を買ったりするとその本を読んでいます。姉が本をもっていくこともあります。

私が行くのはたいてい夜なので、炬燵に入って本を読んでいることが多いです。最近では『続 窓際のトットちゃん』。「知らんことわかってよいわあ。」とか「わたし思っていたことが書いてあるわ。」などと言っています。テレビで三島由紀夫のことを紹介していたら、「あなたの部屋で探したらあったけど、字が小さくて。」と言ったので、本読みが苦手な子が使うルーペを買いました。たまに使っているようです。少し前には、曾野綾子の本を読んでいた。「私の10程上の人やよ。

政治家と裏金のこと書いてあるわ。今のことかと思ったわ。」など、感想を聞かせてくれます。あさのあつこの『バッテリー』を読んだときは、「充電のことかと思ったら、子供の野球の話やわ。」今は、山崎豊子の『運命の人』を読んでいます。この本は4巻まであり、現在3巻の途中。

結構なペースで新しい本をもっていくのですが、3～4冊の本は2週間もあれば「読んだ。」と言います。ホントかなと思うこともありますが、私がそれを咎めたりしないので、また新しい本を読もうと思うみたいです。

晴れた日は畑に行き仕事をしたり、近所の人と話したりする。冬は除雪に精を出す。夜や天気が悪いときは、家で本を読む。そんな生活をこれからもずっと続けてくれたらと願っています。





バイオミミクリー

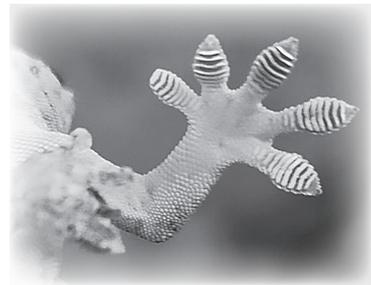
科学情報部 研究主事 二塚 裕子

「バイオミミクリー」という言葉を聞いたことがありますか。「自然と生体に学ぶバイオミミクリー」という本を出版したジャン・ベニユス氏が提唱した言葉です。「バイオ」は生物、「ミミクリー」は模倣することを意味し、生物のからだの構造やしぐみを解き明かし模倣して、新たなものやテクノロジーを生み出そうという考え方を指しています。

私たちの生活を豊かにしてくれているものには、生物のからだのしぐみを利用して開発されたものがたくさん存在します。例えばヤモリの肢の指、ヤモリはガラスの表面に肢の指をはり付けたり離したりしながら垂直に登っていきます。このヤモリの肢の指の優れた接着機能をヒントに開発されたのが「ヤモリテープ」で、日本の会社が開発に成功しました。ヤモリテープは、強度の接着力がある一方、剥がしたいときは簡単に剥がすことができる便利なテープです。ヤモリの肢の指には吸盤等があるわけでもないのに、なぜ垂直面を簡単に登っていきことができるのか。この疑問が開発の原点となりました。研究により、ヤモリの肢の指の吸着は、ファンデルワールス力という原子、分子間にはたらく力によるものだと分かりました。ヤモリの肢の指にはセタという丈夫な毛が無数に生えており、その先がさ

らに分岐し1㎡当たり10億本にもなるそうです。この細かな毛の1本1本が、壁に近い距離まで接近し、ファンデルワールス力によって接着しているそうです。またセタの角度を変えることで、簡単に接着面から離れることができ、これらの構造が接着の重要な要因であることが分かったそうです。この構造をヒントに、カーボンナノチューブの繊維を用いてヤモリテープが開発されました。

私たちの周りには、ヒトにはない能力をもったたくさんさんの生物がいます。身近にいる生物をじっくり観察してみませんか。観察から得た疑問や発想が、世界を変えるかもしれません。



写真：ヤモリの肢

教育相談
連載

「推し」の力



教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美

特定のアーティストや趣味に対する熱狂的なサポート、強い愛着と行動を起こすことは通称「推し」「推し活」と呼ばれ幅広い世代に定着してきています。私たちは日常、ある程度のストレスや不安に直面しています。そのような中、「推し」が私たちの心理的な健康向上に寄与していることが注目され、最近では「推し」に関する研究もされてきています。

原田ら(2023)は「推し」に没頭することで、若者たちの意欲や自己効力感、自己肯定感が向上する傾向を明らかにし、同時に、「推し活動」に時間やお金をかけることが、自己成長や充足感につながることを報告しています。「推し」に対する情熱が、モチベーションの源となり、自己評価を高める効果があるようです。また、森山ら(2022)の研究からも、「推し」をもつ若者は楽しさや幸福感をより多く感じていることが分かります。「推し」は趣味だけでなく、心の拠り所としても機能しています。

「推し」の力は年齢に関係なく、私がカウンセリングで出会う若者からかつて訪問看護をしていた頃の高齢者の方々まで多くの人に影響していると思います。

「一例ですが、人との交流が難しくなり家に引きこもっていた子が、「推し」のサッカーチームができ、チームのメガホンをもって応援に行きたいと何年かぶりに外へ出かけて行きました。また、足を悪くして家で伏せがちだった高齢女性は、「あの人が昨日枕元に立ったのよ」と「推し」の韓国アイドルのことを嬉々として話してくれました。「推し」は社会とつながるきっかけとなり、私たちの生活に活気と幸福感など多くの力を与えてくれると実感しています。

「推し」は単なる趣味ではなく、個人の心理的な健康に良い影響を与える要素と言えるでしょう。「推し」は自己アイデンティティ形成や生きがいを見出す手段として、多くの人にとって重要な存在となっています。さて、みなさんは誰・何「推し」ですか。

〈引用文献〉

原田祐理花, 小松優衣, 加納里梨, 吉村耕一, 「推し」活動が人の健康に及ぼす影響, 山口県立大学学術情報16号〔看護栄養学部紀要 通巻第16号〕2023

森山咲希, 吉岡聖美, 若者における「推し」の意義と心理的効果, 日本感性工学会2022